

いつも楽しい真剣勝負

手島 一恵

新築開館したK図書館は、サービスエリア内に幼稚園1園、保育園2園、小学校1校、中学校1校があった。区民住宅の下が図書館で、そこに住む子ども達は次々と登録してくれたが、それ以外の子ども達はどこにいるのだろうかという有様だった。そこで、エリア内の子どもがいる幼稚園・保育園・小学校・中学校に挨拶周りに出かけ、図書館への来館を呼びかけた。周辺には公園だけという環境も幸いして、早速、幼稚園と保育園の4歳児と5歳児へのおはなし会が決まり、毎月それぞれの園児さんが通い続けてくれた。

『どうながのプレツツェル』(H・A・レイ エ/マーグレット・レイ ぶん/わたなべしげ おやく/福音館書店)では、グレタが穴に落ちた場面で、息を止めて瞬きもしない子があらわれ、焦って猛スピードで読み進めたり、「ここはてっくび」の手遊びでは、一度で覚えめすと書いた私の言葉に、一度では覚えられなかった子が泣き出したりと、冷や汗の出る毎日だった。

小学校へのアプローチは、既に利用者登録していた3年生の仲良し3人組の女子を介してだった。会話を聞いていると学校図書館も利用している様子だったので、私から声をかけた。「K小学校のクラスで図書館に来てもらいたいんだけど、どうすればいいと思う？」既に学校に案内はしてあることも話すと、「じゃあ、手紙を書いたら？私たちが図書先生や担任の先生に届けるけど？」との答え。よほど私が切羽詰った顔をしていたのだろう。彼女たちは快く手紙を届けてくれ、程なく学校からの電話が入った。とんとん拍子に話は進み、校長先生を交えた3年生3クラスが図書館見学に来てくれた。中には図書館の常連さんの顔も見え、この日のために作った図書館案内の紙芝居を聞き、

おはなし会を楽しんでくれた。

その後しばらくして、3人組が現れた。実はその中の一人、MちゃんはK小学校の生徒ではなく、エリアの違うS小だと言う。他の二人から図書館見学がとても楽しかったと聞き、自分の学校にも手紙を書いてというので、私は喜んで手紙を書いた。程なく、S小の3年生3クラスも校長先生を引き連れて来館してくれ、私はまたまた張り切っておはなし会をした。

その後、Mちゃんを通して図書の先生とも知り合い、S小の学校図書館を見学させていただいた。私が図書館見学のおはなし会で、ストーリーテリングの後のおたのしみとしてやった『ことばのこぼこ』(和田誠 さく・え/瑞雲舎)が学校でも話題となって購入したという話や、常連の子ども達のエピソードも聞かせていただき、私もまた、公共図書館では見せない子ども達の一面を知ることができた。そんなご縁で、ストーリーテリングを聞いたことがないという5年生のために、出張おはなし会にも呼ばれた。続けてストーリーテリングをやった後、緊張をほぐそうと「あんたがたどこさ」の手遊びを始め、最後に、ひとことも歌わずに全員で手だけたくという高難度バージョンをやっていると、校長先生が通りかかり、「何かの宗教かと思いました」と言ったというエピソードも聞かされた。

こうして定期的な情報交換は続き、学校との交流も深まっていった。

振り返ってみると、子どもに本の楽しみを手渡している私たちは、子どもと楽しく真剣勝負をしている。図書館員になりたての頃の、先輩のいない中での試行錯誤。周囲に理解してもらえず、くやし涙を流した日々。それもこれも、目の前にいる子ども達があってこそ。泣きたいときも失敗したことも含めて、そんな仕事のできることの、なんと幸せなことか。これからもそれぞれの現場で、この幸せを味わいつくしていこうではありませんか。

(てしま かずえ：子どもと本のボランティア)

子どもたちの心落ち着く場所でありたい

玉村 綾子

*写真は昨年「子ども読書の日」の様子。

生駒南小学校の図書室で学校司書として働くようになって、4年が経ちました。

本校は、奈良県と大阪府の境にある生駒山の麓にあり、生駒山の四季の移ろいを窓の外に感じながら、元気いっぱい子どもたちと図書室で過ごす日々を楽しんでいます。

生駒市では2009年度より学校司書の配置が始まりました。最初は週1日1校から。2017年度には市内の全小中学校に週3日の配置となりました。

学校司書が配置されて以来、本校の図書の貸出は少しずつ増えてきました。1年間の貸出冊数は2013年度には9,157冊でしたが、2019年度は2月末現在で17,509冊まで増えました。児童数424名の本校では、2019年度は児童1人あたり41.2冊の本を借りたこととなります。授業での図書室の利用もだんだん増えているので、計画的に蔵書を構築していくための選書の大切さをより強く感じています。

この4年間、学校司書としてどんなことをしてきたか、少し振り返ってみます。

子どもたちも、先生たちも、使いやすい図書室に

私が初めて本校の図書室に来た4年前、図書室の本の背表紙には「国語＝赤」「理科＝黄緑」「家庭科＝ピンク」のように、教科別に色分けされたビニールテープが貼られていました。子どもたちが本を書架に戻しやすいように、長年とられてきた方法でした。しかし、そのビニールテープが年数を経て剥がれたり歪んだりしていました。私は司書教諭にNDCの大切さを話し、先生方の理解と協力もいただいて、数字と色で分類できるラベルにすべて貼り替えました。今では、図書室に入ると時計回りに0類から9類が配架されています。子どもたちにも「昆

虫の本は茶色い4のラベルの486のところにあるよ」「歴史の本はオレンジの2のところを探してみて」など、声をかけやすくなりました。

書架がきれいに整っていると子どもたちは嬉しいようです。掃除時間は、最後の5分を「本の整理」の時間と決めています。掃除当番の子どもたちは「本の整理」が大好きで、掃除終了5分前になると「やったー！本の整理しよ！」と、ラベルの色と数字を見て一生懸命に数字の順に並べようと頑張ってくれます。本を整理しているときに読みたい本と出会うこともあるようです。実は掃除時間も図書館教育のチャンス。絵本などの面展示も、最近は掃除当番や図書委員の児童にお願いしています。子どもたちは自分が展示した本が借りられると喜び、なかなか借りられないと残念がったり、別の本に変えてみたり。学校司書が書架に目を配り、子どもたちと一緒に整理することで、図書室の書架は使いやすい状態に保たれています。

図書の時間に重ねてきた、目に見えないもの

本校では、週3日の私の勤務日に全クラスの図書室の利用時間が割り当てられています。低学年はその時間を毎週「図書の時間」として、図書室で学校司書に本を何冊か読んでもらったあとで、本を借ります。中学年・高学年は、授業の内容に応じて調べ学習の時間に充てたり、担任教諭からの依頼に応じて学校司書が学習の内容に関わる本を紹介したり（ブックトーク）、絵本を読んだりすることもあります。5年生では、3年続けて国語の授業で本の帯やポップ作りに取り組んでいます。司書は授業の導入で「帯・ポップってどんなもの？」「どんな効果があるの？」ということを実物の帯やポップを見せながら説明します。「傑作にはブックコート

をかけて、図書室ですっと使わせてもらいます」と言うので、子どもたちははりきって作成してくれるので、毎年素敵な作品が生まれ、図書室の財産になっています。

低学年の図書の時間は、私が毎週大切にしている時間です。貴重な授業の1時間をいただいているので、そのときの子どもたちにぴたっと合う本を読もうと常に考えています。毎回25～30分程度、①詩・言葉遊びの絵本・やさしい科学絵本 ②科学絵本・写真絵本 ③昔話絵本・物語絵本の3種類を、季節や学習内容に合わせて、組み合わせて読みます。年に何度か、おはなし（ストーリーテリング）も語ります。

そんな中でもこの3年続けてきたことが、2年生の2学期に『エルマーのぼうけん』（ルース・スタイルス・ガネット作、ルース・クリスマン・ガネット絵、渡辺茂男訳／福音館書店）を8～9回に分けて読むこと。場面に応じて、地図を拡大して見せたり、エルマーの持ち物リストを作って見せたり、挿絵を拡大して見せたりしながら、毎週1～2話ずつ読んでいきます。2年目には、エルマーの荷物を実際に作りました。「ももいろのぼうつきキャンデー2ダース」は夏休みに紙粘土と竹ぐしで作り、「むしめがね6こ」は理科室から借りるなど、エルマーの持ち物を再現してそれを見せながら読みました。これは子どもたちをワクワクさせたようで、廊下で2年生の子に会うと、「先生、今日もエルマーの続き読む!？」「今日はゴリラ出てくる?」など、いろいろな声をかけられます。こんなことはほかの本ではなかなか起こりません。年月を経ても子どもたちの心を惹きつけてやまない『エルマーのぼうけん』の魅力だと実感しています。そして、『エルマーのぼうけん』を読み始めると、エルマーのシリーズ3冊は複本を数冊ずつ用意しているにもかかわらず、書架から1冊もなくなります。2019年度の2年生の年間貸出ランキングでは1～3位をエルマーのシリーズ3冊が独占しました。

『ペニーさん』（マリイ・ホール・エッツ作・絵、

松岡享子訳／徳間書店）も、挿絵を拡大して見せながら2年生の3学期に3～4回



に分けて読みます。『ペニーさん』のシリーズは絵本ですが、文字が多いので低学年の子どもが1人で読むのは大変です。しかし、最後まで読んでこそ大きな満足感を味わえる本。図書の時間に読んだことで、子どもたちに「この本はおもしろい」ということが伝わり、自分から手に取ってみる子もあらわれました。あるとき、図書室掃除担当の3年生の女の子が、面展示する本に『ペニーさん』を選んでいました。そして一言、「わたし、『ペニーさん』好き」と言ったのです。このとき、読んであげて良かったと心から思いました。

低学年では毎年、1年間に1クラス60～70冊の本を読んできました。子どもたちと本の楽しさを共有した幸せな時間は、目には見えないけれども大切なものを積み重ねてきた時間だと感じています。学校司書にこうした機会を与えてくださる先生方にも感謝しています。

心をこめて本を選び、心をこめて読む

私は郷里の学校で司書のいない図書室に接し、司書の資格を取ろうと思いました。司書のいない図書室はいつも鍵がかかっていて、カウンターには本が積み重なり、書架の本は色あせてほとんど動かないままでした。図書室に子どもと本をつなぐ人がいて、書架に心を配り、子どもたちに語りかけることで、初めて学校図書館は生きてきます。

学校司書として働いてきた4年間、何か特別なことをしようという思いより、子どもたちにとって当たり前の環境を整えたいと思って仕事をしてきました。心をこめて本を選び、心をこめて読む。図書室は、子どもたちの心落ち着く場所でありたいと願いながら、今日も図書室にいます。

（たまむら あやこ：生駒市立生駒南小学校）

一人一人との会話を心がけて

林 香

本校の図書室には、立派な応接ソファが一組あります。近隣施設から譲りうけたものです。長休みも昼休みも最初に埋まる席で、男女を問わず本を片手に休んでいきます。1学期の6月頃、体育でシャトルランを終えたばかりの子供たちが「つかれたー！」等と口々に言い交わしながらやってきました。お目当ての本も、返却や貸し出しも後回しに、ソファへ座り込みます。子供たちのがんばりが伝わってきます。私は心をこめて「お疲れ様！シャトルランつらいよね。がんばったねー」と、声をかけました。

初夏の図書室は、窓から気持ちのよい風が入ってきます。疲れ気味だった子供たちも、しばらくすると元気を回復し、まだ上手に図書カードを書けない1年生の手伝いをしてくれます。（貸し出しは、バーコードやICチップ未対応のため、手書きの図書カードにハンコを押すシステムです。）住んでいる町内や習い事等のつながりがなくても、自然に関わっています。上級生は図書委員でなくとも自然と手伝う。そんな子供がたくさんいることに感動します。私は、みんなのやさしい言動を「ちゃんと見ているよ」と、感謝の気持ちを込めて伝えるように心がけています。

他にも、兄弟で仲良く本を選ぶ姿や、友達同士で楽しそうに本の話をする様子から、異学年交流の場になっている喜びを日々感じます。

また、休み時間にはほぼ毎日、誰かしらの「先生、次、なんか面白い本な～い？」と嬉しいレファレンスがあります。司書の腕の見せ所です。質問してくれた子供が最近読んでいた本や好みを考えながら、いくつか提案してみます。提案した本を借りてくれたら、小さくガッツポーズ。数日後、「あまり面白くなかった」という感想をもらうこともあります。6年生が卒業間近

に「先生に紹介してもらった本は全部面白かったです」と、書いた手紙をくれたときは涙が出ました。改めて今後も資料研究をがんばろうと思えました。

さて、学校図書館は文部科学省の出しているガイドラインによると、「児童生徒及び教職員の利用に供する」と、規定されています。私は日頃、子供たちとの会話からさりげなく発せられるリクエストに耳をそばだてています。まるで、クリスマス前に子供たちのほしいプレゼントをリサーチする親のごとく。「私、新体操を習っているんだけど、ここに新体操の本、全然ない」とか「今、サルにはまってて・・・」とか「先生、米沢穂信って知ってる？」（私はこのときは未読で、その後たくさん読みました。面白い!）「この前観た映画が面白かった」（原作を調べよう。）等々、なにげない会話の中には次期購入リスト用のメモに書く内容がたくさんあります。ですが、選書する際には、「もうすぐ教科書が変わるらしい」とか「ポプラディアの改訂まであと何年だったかな」といった、研修会で聞くベテラン司書さんの情報も重要です。また、子供たちばかりに目がいきがちですが、教職員のための選書も必要です。教職員は教養豊かな人が多く、新米司書の私より読書経験が豊富で勉強になります。小説家で随筆家の五木寛之さんが好きな人や、足繁く本屋へ通い、民俗学の本や自然科学の本や小説等、様々なジャンルの本をプライベートで読んでいる人もいます。年度初めに職員室で選書のアンケートをとり、本屋さんの巡回図書では実際に本を手にとって選んでもらいます。子供たちの次の学習で使う本を個別に教えてもらうのはもちろんのこと、昔読んでいた本のお話や最近読んだ本のお話を聞かればラッキー！さっそくメモします。「神様の力

ルテ]シリーズや「ノラネコぐんだん」シリーズ、は、そうして我が図書室に入り、子供たちの読書欲に火をつけています。教職員の熱が、子供たちに伝わり、読書の輪が広がっていくのを目の当たりにできることは僥倖です。先日も、担任の先生におすすめの本を聞いて借りていった男の子が、「先生～、なんか最近、本が面白くなってきた！」と、自分で自分にびっくりしている様子でつぶやいており、大変感心しました。今後も日頃のコミュニケーションを大事にし、選書に生かしていきたいと思います。

選書した本が納品され、装備して配架した

後、子供たちがお目当ての本を借りられなかったという場面によく出くわします。(予約制度はありません) その子供たちの顔と名前と借りたかった本を覚えておいて、チャンスが来たときに「〇〇さん、いまあの棚に“三匹のやぎの がらがらどん” あるよ」とか「“源氏物語” 戻ってきたよ」等と伝えます。このちょっとした特別感が嬉しいようです。大きなイベントや企画のないときこそ、一人一人との会話を心がけています。時間と予算の限られた中、学校全体で本に関わる喜びを、今後も分かち合いたいと思います。(はやしきあり：高岡市立成美小学校)